

伝文

再び会長、事務局を引き受けるにあたって

花部 英雄

2015・2016年度日本口承文芸学会の会長および事務局を引き受けるにあたって、所信を述べておきたい。引き受けるのは二度目になるが、前回の五年前に引き受けた際には、学会をどのように次に引き渡すかに腐心していたように記憶しているが、今回引き受けて、学会を取り巻く環境が大きく変化していることに気づかされた。

その一つは、学会員の現状である。まず数字から先に言えば、現在、個人会員は三百を割ってしまった。高年齢層の退会と若年層の会員入会が減少状態で、ジリ貧傾向が続いている。これは由々しき問題で、手をこまねいているといずれ存亡の危機に陥る結果になりかねない。と言って、即効性のある対策が見つからないのが現状のようで、多くの知恵を結集して乗り越える方策を模索していかなければならない。

また、これに付随して考えるべきは、会員の中には研究に軸を置いた人ばかりではない会員も増えている状況である。その背景には、学会の基盤である社会的環境等の変化があるのだろう。こうした多様な目的の会員が増えている傾向に対して、学会の運営や方向性をこれまで通りの研究一辺倒というわけにはいきまい。どのように考え進めていくかという問題も悩ましい。このことは、学会存立の目的とも関係しているので、幅広い意見を聞きながら進めていく必要がある。

次に、二つ目は現在の研究の問題である。学会が立ち上がった四十年前と現在とでは、口承文芸のおかれている環境が随分と変化してきている。たとえば昔話においては、伝承的な昔話継承は途絶えてしまい、昔話の民俗性の追究はできない状態である。同様のことは他のジャンルについてもいえることで、伝説や歌、謎、諺の現状はどうなっているのか。また、世間話はどのように変容してきているのか、等々の問題がある。

口承文芸は標本ではなく生き物であるという観点からすれば、時代や環境の変化によって変わることは当然のことではあるが、問題は研究対象の変化に応じた研究がなされているかどうかである。ある時代の環境において集積された資料等に基づいて構築された体系や方法が、異なるパラダイムにおいても有効であるという保証はない。この辺の議論をしっかりやらないと口承文芸という学問は形骸化し、取り残されてしまう危険がある。

山積するこうした問題をどのように受け止め対策を練っていくかが、現在の学会に課せられた任務といえる。そのためには、日本口承文芸学会の趣意と現状をしっかりと確認しながら、包括的な対策を学会全体で議論しつつ解決の道を探っていく必要がある。(神奈川県)

「都市語りの可能性—『東京八重山郷友連合会』『東京竹富郷友会』の伝承活動について—」

2015年3月28日、國學院大學にて第68回研究例会、「都市語りの可能性—『東京八重山郷友連合会』『東京竹富郷友会』の伝承活動について—」が、東京八重山郷友連合会、東京竹富郷友会、聴き耳の会の共催で開催された。講演、座談会、話、民俗芸能と多彩な内容で、楽しい会であった。

最初は、久野マリ子氏（國學院大學教授）が、「ウチナーグチから見える文化・社会」を講演された。琉球方言（ウチナーグチ）と文化とのつながり、方言をなくさないための沖縄県の取り組み、各島での方言の違い、琉球方言の特徴などを、具体例を交えながら説明された。講演を聴き、方言と文化は密接に結びついている事を再認識した。

次は、沖縄出身で現在は関東在住の、瀬戸克氏・富野芳江氏・前新二三四氏（東京竹富郷友会）、仲本学氏（東京沖縄県人会）に、根岸英之氏と飯倉義之氏が話を聞いた。幼少時の思い出、琉球方言、郷友会、民俗芸能など、興味深い話を色々と聞いた。

そして、大川安子氏がご自身の先祖、多良間真牛の伝説に対する思いなどを話された。黒島の多良間真牛は、台風で無人島に流されたが、鱻に助けられ、故郷に戻る事が出来た。その話を聞いた国王は、多良間牛に一連の出来事を描いた絵巻を贈った。子孫は鱻を食べないという伝説である。本家には多良間牛の掛け軸、大川家では、その模写があり、掛け軸の写真も見せてくださった。伝説の筋はわかるが、語れない。本会のために、書物等で調べたり、親族に聞いたりして話をまとめたそうである。また、姉に鱻皮のバッグとは知らずに贈ってしまい、怒られたという逸話も話された。これらから、大川氏一族は、伝説を話ではなく、先祖の事として受け止めている事がわかった。伝説の伝承者にしかわからない話を聞き、勉強になった。

休憩を挟み、東京竹富郷友会の方々が、民俗芸能を披露してくださった。紙面の都合上、演目は挙げられないが、観客も心が躍るような、楽しい踊りや唄であった。

最後に狩俣恵一氏が、これまでのまとめをした。的確な説明で納得する事が多かった。その中でも、方言の継承と民俗芸能が密接な関係があるという話が印象深かった。

会場からは、島内の人と島から出た人との方言差について、質問があった。狩俣氏は、先ほど観た演目の「鷺の鳥」を例に挙げ、故郷を離れた人の方が古体を留めていると説明した。

本会では、まず、沖縄出身の方々の、前向きに生きようとする生命力を感じ、感動した。そして、故郷の文化に誇りを持ち、それを継承している方々が、都市にもいる事を知った。現在、幼い頃に聞いた話を語る、従来の語り手はいなくなったと言われる。私もそう思い込んでいた。しかし、それは固定観念で、都市にも故郷で聞いた語りを保持している語り手がいるのではないかと感じた。楽しいながらも、様々な事を考えさせられた四時間半であった。

最後に、会場設営や受付などで多大なるご尽力をいただいた、「聴き耳の会」の皆様にご挨拶いたします。（東京都）



第39回日本口承文芸学会大会 公開講演報告1

繁原 央

廣田 収氏「昔話と唱え言・昔話の唱え言-話型と伝承的表現-」

国文学の中古から中世にかけて業績を積んできた廣田収氏は、一方で昔話の調査も長年なされていて、長野県下伊奈郡の桜井小菊さんから聞き取りをし、記録集をまとめているという（『桜井小菊昔話記録集』私家版）。その中から「尻鳴篋」「鳥吞爺」「狸むかし」「鼠浄土」「瘤取爺」「猿神退治」の本文や唱え言一覧を資料として提示され、次のように論じられた。

昔話の中に心地よい音律的、韻律的な表現があり、反復的に組み込まれている。この表現を「伝承的表現」と呼び、そこには年中行事の中で伝承されてきたものや、「作られた」と推測されるものもある。これを柳田國男の考察に従い、仮に「唱え言」という用語を使っておく。語られる説話と書かれた説話との双方を、伝承という視点から捉えると、伝承されてきた昔話の話型に、固定的な伝承的詞章である唱え言が組み込まれることで、昔話は重層的に織られているといえる。

廣田氏の講演は、まず膨大な量の資料を用意されていたことに驚かされた。本文三十二頁十六枚、資料五十八頁二十九枚である。しかも各昔話の唱え言一覧はそれぞれ数十の例をしめしてあり、緻密な論旨とともに感動的であった。

桜井さんから一九七七年に「尻鳴篋」の話聞いた廣田氏は、嫁様の尻からでる音が「高い山から」という民謡だったことに驚き、「唱え言」に興味をもつようになったという。この話を十年間に四回聞き、その語り口は変化しているが、「たかいやまから たにそこみればよ うりやなすびの はなざかりよ」の部分はぴったり一致している。このように唱え言が固定的であることをまず具体的な事例でしめされた。

その唱え言と昔話がどのような関係にあるか、昔話の中で唱え言はどのように機能しているかを考証され、昔話の場面と配置、唱え言の組み入れ方が昔話の語りの記憶の鍵になっている。唱え言を仕掛けと捉えると、「尻鳴篋」の「たかいやまから」という唱え言などは「壽詞」とみることができ、このように民俗から取り込まれた唱え言を分析することで、昔話のあやふやな伝播論を克服できるのではないかとされる。

昨年『説話比較の方法論』（勉誠出版）を上梓された氏は、文献による国文学の説話研究を踏まえつつ、口頭伝承としての昔話の研究方法を結び付けて、論じられている。その方法を桜井さんから聞きとりをした昔話を使って、精緻に提示された講演だった。（静岡県）

第 39 回日本口承文芸学会大会 公開講演報告 2

中村 とも子

荻原眞子氏「ユーラシアの叙事詩研究の方法をめぐって」

ユーラシア、特に中央アジアやシベリアの英雄叙事詩は各民族で採録・出版がさかんに行われ、蓄積されている。それらを土台に、『シベリア諸民族英雄叙事詩の典型場面のインデックス（試験的出版）』（E.N.クジミナ 2005 ノヴォシビルスク出版）が出版されている。荻原氏の講演は、本書を中心に、英雄叙事詩の特徴的な場面を構成する比較項目に解説をくわえながら、その意義を語るものだった。世界の口承文芸には各種の分類・インデックスの蓄積があることは周知の通り。しかし、ユーラシアの英雄叙事詩の体系化を目指す試みは本書が嚆矢であり、その意義は大きなものだという。

氏は①テュルク諸族、ブリヤート②ヤクーチア・エヴェンキ③東エヴェンキ④ユカラの四つの叙事詩の対照表を示し、具体的な比較をした。日本国内の昔話しか知らない筆者にとっては、大雑把な構成要素を示されただけで、雄大な舞台、魔法的なモチーフ、異質な要素と言ったものに魅了された。主人公の英雄が男性だけでなく女性があること、その超能力の一つに音楽の才があり、歌うと声が響き渡り、木々に葉が芽生えるなど、浪漫的なイメージを受けた。或いはまた、主人公たちがでんぐり返しのような動作をして変身したり、元に戻るには身震いすることなども興味深い。日本では、そのような変身手続きは狐や狸の話にはあるが、本格昔話にはまずみられないのではないか。一方で、似たようなモチーフもあることを知った。英雄叙事詩では闘いと結婚が大きなテーマだというが、闘う者同士、魂を体外に保管するので、目前の相手を攻撃してもらいが明かない。別所にある魂を攻撃しないと倒すことができない。この魂の外在という点は、日本にも眠る人の体から魂が虫の姿で出入りする「夢の蜂」という話があり、身体から遊離する生命の源という点に限れば、非常に近いものがあると感じた。

今回の「インデックス」が示す可能性は非常に大きいと荻原氏は指摘する。ロシアの叙事詩研究者、B.N.プチャーロフはユーラシアの多民族の叙事詩に多くの共通性や類似、或いは平行する特徴を認め、そのことは地域や民族を超えた一般的な普遍性に由来するとしている。その普遍性的一端が今回の「インデックス」分析によって結論付けられている。ならば、このインデックスに照らして不足しているものを補い、ユーラシアにつながるアイヌの叙事詩も比較検討の土俵ができるだろうという。初日の夜に開かれた懇親会上で、荻原氏はアイヌ以外の日本にも英雄叙事詩があったかもしれないという可能性も導かれると話した。非常に大きな、同時に重要な課題を示唆された。（東京都）

高木昌史氏「比較民話学のすすめ—柳田國男のグリム研究再考—」

柳田國男は日本の民俗学および口承文芸学を樹立するにあたって、グリム兄弟編『子どもと家庭の童話集』（グリム童話集）を集中的に研究したという。1921～1923年に国際連盟常設委任統治委員会委員としてジュネーブに赴任した際、ヨーロッパ各地で民俗学関係文献を多数入手し、なかでもボルテ／ポリフカの『グリム童話集注釈書』は重要視して活用した。高木氏の講演は、柳田のグリム童話研究を再考することによって、その口承文芸学が元来国際的なものであったことを検証する。具体例として、柳田がグリム童話のうち特に注目した「ハンスばか」（初版第1巻54番、第2版以降削除）をとりあげ、柳田がなぜ関心を抱き、どう読み解いたかという経緯を分析した。まず示されたのは、成城大学民俗学研究所に所蔵するボルテ／マッケンゼン『ドイツ昔話事典』（1930～1940年、第2次世界大戦の混乱により第2巻で中断）への柳田の書き込みである。「小舟に乗せての遺棄」の項、項目名への下線と欄外に「ウツボ舟」の書き込みがある。これに関わる柳田の「うつぼ舟の王女」を始めとする論文、異常誕生／笑わない王女／遺棄といったテーマ群について、また、柳田はヴントの民族心理学に関心をもっていたこと、比較研究をもとにして各民族文化を解明するという柳田の比較民話学への志向が明らかになる。

グリムの仕事のうちにすでに昔話の比較研究の観点はあったわけだが、高木氏は、グリム以後の比較研究の第1派を地理・歴史学派（アールネ『昔話の比較研究』1908年など）、第2派を中断した『ドイツ昔話事典』を発展的に継いだ『昔話百科事典』（1977～2015年）とする。柳田がいった通り「比較研究はひとりでは覚束ない」（『昔話覚書』）が、『昔話百科事典』はドイツ・ゲッティンゲン学会の大プロジェクトとして世界の口承文芸研究者が執筆協力し—私もOとWのうち各1項目を執筆する機会に恵まれた—、第1巻刊行から38年を経た今年、第15巻索引の刊行でついに完結する。柳田の先見性を指摘したうでの「グローバルとナショナルが交錯し合う今日の世界的状況に鑑みても、昔話（民話）を比較研究する意義はますます高まっている」という高木氏の比較民話学のすすめ、それを受ける私たちがこれから先どのように進めていくのかが問われている。（神奈川県）

第 39 回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 1

星野岳義氏「菅江真澄『つゆの塵束』所収〈古神社縁起〉の論点整理」

本発表では、菅江真澄『つゆの塵束』にみられる「古神社縁起」を取り上げて、従来の研究を紹介した上で、その成立事情を内容から推測する。加えて、真澄がこの縁起をいかに認識していたかを問題にされた。

「古神社縁起」は、初めに神仏の名称を並べた部分と、安倍氏の合戦をものがたった部分、獅子舞の由来を説明した部分などから成る。発表者は、この神仏を列挙した部分をその内容から「宗教性の薄まった物尽し」とみる。また、真澄はこの縁起に関して虚構という認識だったなどと説かれた。

発表では、従来の研究を詳しく紹介された。そのためか、考察に十分な時間が取れなかった。口頭発表の場合、時間配分にも留意が必要である。縁起の成立を問題にするが、いかなる契機のもと、書き上げられたのかも問題となろう。また、神仏を列挙する点に関しては、単なる紹介とみることもで

きようが、そうした神仏への挨拶の意味があるのかもしれない。また、『神名帳』では神名を列挙し、祭りではそれを読み上げる場合もある。この点も考え合わせてみなければならないと思われた。

富樫 晃氏 『八百比丘尼』伝説の研究—佐渡の伝承と「田屋」をめぐる—

本発表は、新潟県佐渡市羽茂大石の田屋の八百比丘尼伝説を取り上げて、この伝説の形成と定着について論じられた。

当伝説は、田屋には人魚の肉を食べて八百歳まで生きた八百比丘尼の生家があるといった内容として知られてきた。発表では、田屋と呼ばれる家の現状を報告した上で、当家が管理する熊野神社の「旧記取調書」（明治三十四年）にみえる、比丘尼がこの家に仮住まいして諸国を遍歴し、当家の六代の孫に対面したという伝説に注目する。ここから発表者は、田屋家が熊野比丘尼の活動の拠点になっていたと推測し、熊野比丘尼の何代にもわたる活動からこの八百比丘尼伝説が形成されたとみる。

会場からは、「田屋」という名称から当地と伊勢との関わりや、熊野比丘尼の当地での活動の痕跡について質問が寄せられた。

これまで、八百比丘尼伝説の定着に熊野比丘尼に関わったと説かれてきた。そうした研究史の中で、今回の発表がいかなる位置にあるかを説明されるとよりわかりやすかったのではないかと思われた。また、今回は文献資料を主に扱われたが、現地ではさまざまに伝えているはずである。その実態についても知りたかった。

関根綾子氏 「藤澤衛彦の伝説観考—『日本伝説叢書』を中心として—」

本発表は、昔話・伝説研究の先駆者の一人である藤澤衛彦が編纂した『日本伝説叢書』を取り上げて、藤澤の伝説観について論じられたものである。

発表者は、藤澤が有形無形を問わず、土地の伝承を伝説だと認識していたと考えられること、話の配列が郡・国から町・村の順番であるのは、最初に土地の成り立ちを説明するためとみられること、人物に関係する話が多いのは、郷土の偉人を大切に土地の特色を見出そうとするためと推察されること、伝説を通して土地の特色を見出そうとしたとみられることを指摘された。

『日本伝説叢書』の特色は、柳田が指摘するように伝説を下総など国別に分けた点にある。柳田は、伝説にみられる地方色は後代の変化によるとみて、伝説の本質や発生の問題には直接関わらないものとする。それよりも土地を飛び越えてなぜ共通性を持つのかに注目して、それを伝説の特色と捉えている。そうした捉え方に対して、なぜ藤澤は「地域」にこだわったのであろうか。その点を藤澤の全体像の中で位置づけるとともに、学史の中でいかに位置づけられるかが問題となるように思われた。

(青森県)

第 39 回日本口承文芸学会大会 研究発表報告 2

高木 史人

末次 智氏 「歌の発生についての一考察—生物言語学からの接近—」

末次智は歌が好きだ。だから始原（始源と呼ぶに発生と説いたが）に遡っても押さえない。語りが好きなら私もその衝動を押さえない。音声もことばも歌も語りも始原に遡り押さえない。その仲間に遠くは紀貫之、間近くは川田順造、藤井貞和、酒井正子らの名前も浮かぶ。だから、末次の今回

の発表は、気持ちがいたく分かる。始源は直線的な時間と循環する時間とにまたがる、「広い」意味での歴史叙述の問題だろう。それを叙述するのは、私たちだ。私たちの思いや願いが叙述することばの中にもっている。だが好きという気持ちだけでは、物足りない。方法的に抑制した思いや願い、詰まらないことばかもしれないが冷静な目的意識を抱えないと、ある歴史叙述を好くか嫌うだけの感情が巷間満ちあふれる事態を招来しかねない。

末次の今回の発表は、「ことば（意味・頭・文化）／音韻（非意味・体・自然）」という二項に世間一般に通用している優／劣を見据えて、それを相対化する、さらには優／劣をひっくり返すという目的があった。だから好きだけではなかった。その上で問いかけたい。それを論じるのに、この遡り方、この歴史叙述しかないのか、これだけが有効なのか、と。岡ノ谷一夫に大きく依拠している。私も優れた（と信じる）研究者の著作にのめり込むのは得意技だから、よく分かる。いったん、寄り添ってみる。そこから始まり、さらに寄り添ってみたものをも相対化しつつ、自説を磨き上げる機縁とする。この手順だ。おそらく末次も、きっとそうやって自説を鍛えていくはずだ。今回の発表は、その入り口だったろう。続きを、読みたい。

小池ゆみ子氏「菊池力松一族の昔話伝承の姿のひとつ 食わず女房の場合」

遠野の菊池力松・サノ夫婦は子どもの内、長女・鈴木サツ、長男・菊池嘉七、次女・正部家ミヤ、三女・菊池ヤヨ、五女・須知ナヨは、力松の昔話を受け継いだ。嘉七の娘・菊池榮子も伯母や叔母たちから昔話を受け継いだ。今回、小池ゆみ子は、彼らの語る食わず女房の語り口を比較・検討した。その詳細は、会場にいた人には周知だし、こなかった人もやがて出よう菊池榮子の昔話集や学会の研究誌などで小池じしんの文章にきつとに触れるだろう。だからここでは、その周辺を述べたい。野村純一は「昔話の語り手」を結実した個としての表現を持つが群れの中に埋没する運命だと述べた。創造と伝承との相克があるとの見立てだろう。小池の問題意識はそれに近い。だが、加えて、昔話の語り手が語る者と聴く者との間に生成することも押さえたい。聴き手が変われば、語りは変わる。しかも、同じ聴き手でもその時々コンテクストで語りは変わる。聴き手を隠して、語りは分析できない。語りの分析は、多元方程式や函数を解くようなものだ。今回の分析の資料は、聴き手も場も実にさまざまだ。先行研究は存外あると思う。小池がどのように解くか。わくわくしている。

ところで、「食わず女房」は、柳田国男が仮に命名したと告白している。民間には「飯（まま）食わぬ嫁」に類する呼び名で伝えている場合が多かったと思う。したがって、食わず女房と称呼する語り手には、なるべく注意している。どうだろう。（愛知県）

「口承の記憶と継承」

口承文芸は、各々の語り手が何度も繰り返し語りまた話すことによって、次の世代へと伝承されてきた。それは、語り手はその内容を記憶していなければ成り立たないことであり、口承文芸の「継承」は「記憶」と深く関わると言える。そこで、語り手が多くの話を記憶し語ることができるのは何故なのか、また様々な話がどのように記憶され語られるのか—等も含め、口承にとっての記憶の問題に迫

ろうとするシンポジウムであった。

まず花部英雄氏（國學院大学）が「被害記憶の形象と継承」と題して、江戸時代の自然災害による被害の記憶をテーマに話された。話題にしたのは、宝暦元年(1751)の高田大地震による「名立崩れ」、天明3年(1783)の浅間山噴火の際の「蒲原村の埋没」、寛延から天明にかけての南部領の飢饉である。花部氏は、これらが甚大な被害をもたらした自然災害であったにもかかわらず、その記憶が意外に各家での伝承としては語られてこなかったことに注目する。そして、災害の記憶は家庭の茶の間で世代を超えて語り継ぐには、あまりに辛かったのではないか、むしろその伝承は集団的記憶として捉えることで違った面が見えてくるであろうとされた。さらに、その集団的記憶が物語化（形象化）され長く伝承されるためには、例えば「名立崩れ」伝承における劇作品や「浅間山噴火大和讃」のような一定の〈枠〉が必要とされるのだろうかとの考えを提示された。

矢部敦子氏は「昔話の伝承と再生—語りの場の記憶から見えてくるもの—」と題して、和歌山県で過ごした幼少期に祖母から毎日のように昔話を聞いた経験と、それらの話が子育てをする中での様々なシーンで蘇り、自らも語りを始めるようになったことを話された。昔話の記憶は祖母が語ってくれた際の〈場〉の記憶と鮮明に結びつき、話を思い出すと、祖母の語り口や表情、当時の自分の気持ちを初め、様々なことが次々つながって思い出されるとのことである。伝承の語りは語り手と聞き手の対話の中にこそ存在すると言う矢部氏は、現在は小平市に住まいつつ、和歌山の言葉での語りの活動を続けておられる。

最後に心理学者の廣瀬清人氏（聖路加国際大学）が「昔話の心理機能と意味世界—個から場へ—」という演題で話された。廣瀬氏の専門は実験心理学であるが、15年前新潟県の大学に赴任したことがきっかけで二人の伝承の語り手と出会い、以来「昔話の語りは記憶のメカニズムによるのか」との間に取り組んでこられた。そして、二人の語り手から多くの昔話を聞き取り、分析・考察を重ねた結果、昔話の記憶は一般の記憶についての理論では説明しきれないとの結論を得たという。語り手が昔話を記憶するには、自分にとって重要な他者から聞いた話であることや、その話が生きていく上で援助となるような意味世界を持つということが深く関係しており、語り手にとって昔話は暖かく親しいものと感じられることが記憶を支えるとされた。それはまた、語り手と聞き手が作る〈場〉の存在が重要であることと関わっているという。

続いてパネラーとフロアを交えた質疑・討論では、矢部氏・廣瀬氏が共に強調された「語り手と聞き手による語りの〈場〉の存在」が「記憶」と強く結びつくことや、語り手は〈話の種〉とも言えるものを記憶の核とし、その場その場で語りを紡いでいる—といったことが話題になった。その中で、廣瀬氏が、媪（語り手）の話は自分が訪れる度に増幅し次々と語りの花が開くようであった—というふうに言われたことは、口承の記憶が語り直しによってその都度再構築される姿を感じさせられ、非常に興味深かった。

また、被害記憶の伝承については、太平洋戦争や阪神・東日本の大震災等の記憶をどのように語り継いでいくかという課題にもつながる—との意見が出され、現代に生きる我々一人一人が心に留め考え続けるべき、大切なテーマであることを再認識した。そして、次世代への継承という観点から過去に学ぶならば、花部氏の言われたように、それが集団的記憶として一定の〈枠〉を持った物語（うたや文字によるものも含む）に形象化された時、広い意味での伝承の力を持つのではないかと思われるのである。以上、様々なことを考えさせられ、かつ学ぶことの多いシンポジウムとなった。

（滋賀県）

◆はじめに—伝承の語りから新しい語りへ—

江戸時代の中期くらいから草双紙が流行した。そのなかで子どもを対象にした赤本とよばれる絵本が登場した。「桃太郎」「かちかち山」「舌切雀」「さるかに合戦」「花咲爺」「ぶんぶく茶釜」「猿のいきぎも」などである。また、「おもちゃ絵」のなかの「お伽昔話づくし」（豆本）が一枚刷りで売られて出されている。その流れは明治時代に入ってからも続いていった。

泉鏡花の『絵本の春』（1926年）には、「—絵解をしてあげますか…読めますか、仮名ばかり。」と描かれている。鏡花が幼少期に体験したと思われる草双紙の「絵解き」のことである。江戸時代～明治時代の子どもたちは、一枚の絵（…づくし）や草双紙（赤本）の挿絵などを見ながら、おとなや年長のものから絵解きを聞いて育ったのだった。伝承の語りだけではなく、広義に解釈するならば新しい語りがすでに始まっていたといえる。

◆日本民話の会・語りの会（〒161-0033東京都新宿区下落合4-6-17-101）

〈民話の語りを聴くだけではなく、自分たちも語り手になろうという勉強会です。/偶数月第4日曜日には、川崎市にある日本民家園の「お国言葉で語りっこ」で、いろいろばたの語りをを行っています。「お国言葉語りっこ」は、事前の申込は不要です。日本民家園へ直接おいでください。/月一度、語りの勉強会をしています。語りの会への登録は、事務局までご連絡ください。語りの会例会当日も受け付けています。/次の方の会は、10月25日「お国言葉で語りっこ」。〉（ホームページから）

◇日本民話の会事務局 /

(千葉県)

米屋陽一 民話・伝承コレクション展



会期・2015年11月10日(火)～15日(日)
会場・市川市八幡市民談話室
3階/マイギャラリー
時間・10:00～19:00
*初日は13:00から/最終日は18:00まで
*「むかし語りの会」…14・15日の午後から
*打ち上げ…15日の19:30から

喜多川歌麿「山姥と金太郎」・歌川国貞「蓬莱宮三橋」・河鍋晩斎「晝斎百鬼画談」「狸和尚」・菱川春宣「伽嘶桃太郎」・鬼原金四郎「日光山東照宮祭典行装略図」・児玉玉鳳「御伽絵」(全十五葉)・草双紙表紙絵巻のほか、奈良絵・鳥羽絵・大津絵・浮世絵・錦絵・おもちゃ絵・おぼけ絵・切り紙・双六・歌留多・紙芝居・折り本・ちりめん本・子ども絵本・軍国主義昔話絵本「モモタラウ」「サルカニ」「シタキリスズメ」など、約150点[江戸・明治・大正・昭和(戦前・戦中・戦後)期]を展示します。

主催・米屋陽一 民話・伝承研究会

協力・日本民話の会・市川民話の会・船橋の民話をさく会
TEL/FAX・047-338-8319 携帯・080-6686-1042



市川市八幡市民談話室
3階/マイギャラリー
市川市八幡2-4-8
TEL 047-334-5656
FAX 047-334-5718

【交通】

- JR総武線本八幡駅北口徒歩3分
- 京成線京成八幡駅から徒歩3分
- 都営新宿線本八幡駅徒歩3分

※市川市八幡市民談話室には駐車場がありません。お車でのご利用はご遠慮願います。

「各地の語り・語り手・語りの場の紹介」は4回にわたってお届けしていく予定です。会員のみなさまからの情報をお待ちしております。会報委員会 (horuhoru4@gmail.com 達) まで。

事務局便り

○ 寄贈書籍 (2015年2月～2015年7月受け入れ)

- ・ 神奈川県日本常民文化研究所『民具マンスリー』第47巻7号～12号、第48巻1号～4号 2014年10月～2015年3月、2015年4月～7月
- ・ 『国立歴史民俗博物館研究報告』第192集、第189・190集、第191・193集、第194・195集 2014年12月、2015年1月、2月、3月
- ・ 佐藤健二著『柳田国男の歴史社会学 続・読書空間の近代』せりか書房 2015年2月
- ・ 神奈川県日本常民文化研究所『歴史と民俗』31 平凡社 2015年2月
- ・ 日本民俗学会『日本民俗学』第281号 2015年2月
- ・ 昭和館『昭和のくらし研究』第13号 2015年3月
- ・ 橋本裕之著『震災と芸能 地域再生の原動力』追手門学院大学出版会 2015年3月
- ・ 小田淳一編訳『セーシエルの民話Ⅱ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所2015年3月
- ・ 小田淳一／花渕馨也／サリム・ハチュブ／アブドゥ・バカル・サイード編訳『コモロ諸島の民話Ⅰ ンガジジャ方言民話』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2015年3月
- ・ 花渕馨也／小田淳一／サリム・ハチュブ／アブドゥ・バカル・サイード編訳『コモロ諸島の民話Ⅱ ムワリ島方言民話』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2015年3月
- ・ 深澤秀夫／ラザフィアリヴニ・ミシエル編訳『マダガスカルの民話Ⅰ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2015年3月

○ 日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學文学部 花部英雄研究室

Tel: 03-5466-0224 (研究室) Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金1000円、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。